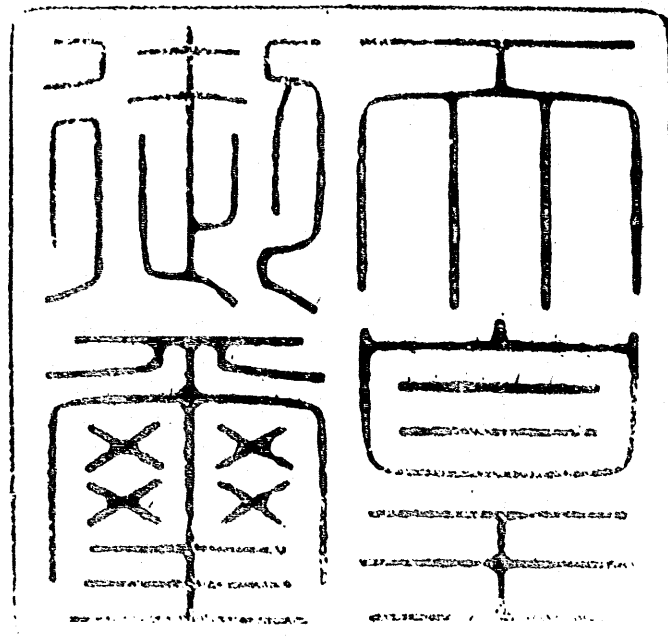


一月二十日
午年
滿洲國
勅令

朕明治三十八年十二月二十二日清國北京ニ於テ朕カ
全權委員ト清國全權委員ノ記名調印シタル滿洲ニ
關スル條約ヲ批准シ茲ニ之ヲ公布セシム

睦仁



明治三十九年一月二十九日

内閣總理大臣侯爵西園寺公望
外務大臣 加藤高明

大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下ハ
均シク明治三十八年九月五日即光緒三
十一年八月七日調印セラレタル日露兩
國講和條約ヨリ生スル共同關係ノ事項
ヲ協定セムコトヲ欲シ右ノ目的ヲ以テ
條約ヲ締結スルコトニ決シ之カ爲メニ
大日本國皇帝陛下ハ特派全權大使外務
大臣從三位勲一等男爵小村壽太郎及特
命全權公使從四位勲二等内田康哉ヲ大

清國皇帝陛下ハ欽差全權大臣軍機大臣
總理外務部事務和碩慶親王欽差全權大
臣軍機大臣外務部尚書會辦大臣瞿鴻禨
及欽差全權大臣北洋大臣太子少保直隸
總督袁世凱ヲ各其ノ全權委員ニ任命セ
リ因テ各全權委員ハ互ニ其ノ全權委任
狀ヲ示シ其ノ良好妥當ナルヲ認メ以テ
左ノ條項ヲ協議決定セリ

第一條

清國政府ハ露國カ日露講和條約第五條

及第六條ニヨリ日本國ニ對シテ爲シタ
ル一切ノ讓渡ヲ承諾ス

第二條

日本國政府ハ清露兩國間ニ締結セラレ
タル租借地並鐵道敷設ニ關スル原條約
ニ照シ努メテ遵行スヘキコトヲ承諾ス
將來何等案件ノ生シタル場合ニハ隨時
清國政府ト協議ノ上之ヲ定ムヘシ

第三條

本條約ハ調印ノ日ヨリ効力ヲ生スヘク

且大日本國皇帝陛下及大清國皇帝陛下
ニ於テ之ヲ批准セラルヘシ該批准書ハ
本條約調印ノ日ヨリ二箇月以内ニ成ル
ヘク速ニ北京ニ於テ之ヲ交換スヘシ
右證據トシテ兩國全權委員ハ日本文及
漢文ヲ以テ作ラレタル各ニ通ノ本條約
ニ署名調印スルモノナリ
明治三十八年十二月二十二日即光緒三
十一年十一月二十六日北京ニ於テ之ヲ
作ル

大日本帝國特派全權大使外務大臣從三位勳一等男爵小村壽太郎(記名印)
大日本帝國特命全權公使從四位勳二等 内田康哉(記名印)

大清國欽差全權大臣軍機大臣總理外務部事務 慶親王(記名印)
大清國欽差全權大臣軍機大臣外務部尚書會辦大臣 瞿鴻禨(記名印)
大清國欽差全權大臣北洋大臣太子少保直隸總督 袁世凱(記名印)

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ帝祚ヲ踐ミタル
日本國皇帝(御色)此書ヲ見ル有衆ニ宣示ス
朕明治三十八年十二月二十二日清國北
京ニ於テ帝國全權委員及清國全權委員
ノ記名調印シタル滿洲ニ關スル條約ノ
各條目ヲ親シク閲覽點檢シタルニ善ク
朕ノ意ニ適シ間然スル所ナキヲ以テ右
條約ヲ嘉納批准ス
神武天皇即位紀元二千五百六十六年明
治三十九年一月九日東京宮城ニ於テ親

名ヲ署シ璽ヲ鈐セシム

御名 國璽

外務大臣加藤高明印

日清兩國政府ハ滿洲ニ於テ双方共ニ關係ヲ有スル他ノ事項ヲ決定シ以テ遵守ニ便ナラシムル爲メ左ノ條項ヲ協定セリ

第一條

清國政府ハ日露軍隊撤退ノ後成ルヘク速ニ外國人ノ居住及貿易ノ爲メ自ラ進ミテ滿洲ニ於ケル左ノ都市ヲ開クヘキコトヲ約ス

盛京省 鳳凰城 遼陽 新民屯 鐵嶺 通江子 法庫門
吉林省 長春 寬城子 吉林 哈爾濱 寧古塔 琿春 三姓
黑龍江省 齊齊哈爾 海拉爾 愛琿 滿洲里

第二條

清國政府ハ滿洲ニ於ケル日露兩國軍隊
竝ニ鐵道守備兵ノ成ルヘク速ニ撤退セ
ラレムコトヲ切望スル旨ヲ言明シタル
ニ因リ日本國政府ハ清國政府ノ希望ニ
應セムコトヲ欲シ若シ露國ニ於テ其ノ
鐵道守備兵ノ撤退ヲ承諾スルカ或ハ清

露兩國間ニ別ニ適當ノ方法ヲ協定シタ
ル時ハ日本國政府モ同様ニ照辦スヘキ
コトヲ承諾ス若シ滿洲地方平靖ニ歸シ
外國人ノ生命財産ヲ清國自ラ完全ニ保
護シ得ルニ至リタル時ハ日本國モ亦露
國ト同時ニ鐵道守備兵ヲ撤退スヘシ

第三條

日本國政府ハ滿洲ニ於テ撤兵ヲ了シタ
ル地方ハ直ニ之ヲ清國政府ニ通知ス
ヘク清國政府ハ日露講和條約追加約款

ニ規定セル撤兵期限内ト雖既ニ上記ノ如ク撤兵完了ノ通知ヲ得タル各地方ニハ自ラ其ノ安寧秩序ヲ維持スル爲メ必要ノ軍隊ヲ派遣スルコトヲ得ルモノトス日本國軍隊ノ未タ撤退セサル地方ニ於テ若シ土匪ノ村落ヲ擾害スルコトアル時ハ清國地方官モ亦相當ノ兵隊ヲ派遣シ之ヲ勦捕スルコトヲ得但シ日本國軍隊駐屯地界ヨリ二十清里以内ニ進入スルコトヲ得サルモノトス

第四條

日本國政府ハ軍事上ノ必要ニヨリ滿洲ニ於テ占領又ハ收用セル清國公私財産ハ撤兵ノ際悉ク清國官民ニ還附シ又不用ニ歸スルモノハ撤兵前ト雖之ヲ還附スルコトヲ承諾ス

第五條

清國政府ハ滿洲ニ於ケル日本軍戰死者ノ墳墓及忠魂碑所在地ヲ完全ニ保護スル爲メ總テ必要ノ處置ヲ執ルヘキコト

ヲ約ス

第六條

清國政府ハ安東縣奉天間ニ敷設セル軍用鐵道ヲ日本國政府ニ於テ各國商工業ノ貨物運搬用ニ改メ引續キ經營スルコトヲ承諾ス該鐵道ハ改良工事完成ノ日ヨリ起算シ(但シ軍隊送還ノ爲メ遅延スヘキ期間十二箇月ヲ除キ二箇年ヲ以テ改良工事完成ノ期限トス十五箇年ヲ以テ期限ト爲シ即光緒四十九年ニ至リテ

止ム右期限ニ至ラハ双方ニ於テ他國ノ評價人一名ヲ選ミ該鐵道ノ各物件ヲ評價セシメテ清國ニ賣渡スヘシ其ノ賣渡前ニ在リテ清國政府ノ軍隊並兵器糧食ヲ輸送スル場合ニハ東清鐵道條約ニ準據シテ取扱フヘク又該鐵道改良ノ方法ニ至テハ日本國ノ經營擔當者ニ於テ清國ヨリ特派スル委員ト切實ニ商議スヘキモノトス該鐵道ニ關スル事務ハ東清鐵道條約ニ準シ清國政府ヨリ委員ヲ派

シ查察經理セシムヘク又該鐵道ニ由リ
清國公私貨物ヲ運搬スル運賃ニ關シテ
ハ別ニ詳細ナル規程ヲ設クヘキモノト
ス

第七條

日清兩國政府ハ交通及運輸ヲ增進シ且
之ヲ便易ナラシムルノ目的ヲ以テ南滿
洲鐵道ト清國各鐵道トノ接續業務ヲ規
定セムカ爲メ成ルヘク速ニ別約ヲ締結
スヘシ

第八條

清國政府ハ南滿洲鐵道ニ要スル諸般ノ
材料ニ對シ各種ノ税金及釐金ヲ免スヘ
キコトヲ承諾ス

第九條

盛京省内ニ於テ既ニ通商場ヲ開設シタ
ル營口及通商場トナスヘク約定シアル
モ未タ開カレサル安東縣並奉天府各地
方ニ於テ日本居留地ヲ劃定スル方法ハ
日清兩國官吏ニ於テ別ニ協議決定スヘ

シ

第十條

清國政府ハ日清合同材木會社ヲ設立シ
 鴨綠江右岸地方ニ於テ森林截伐ニ從事
 スルコト其ノ地區ノ廣狹年限ノ長短及
 會社設立ノ方法並合同經營ニ關スル一
 切ノ章程ハ別ニ詳細ナル約束ヲ取極ム
 ヘキコトヲ承諾ス日清兩國株主ノ利權
 ハ均等分配ヲ期スヘシ

第十一條

滿韓國境貿易ニ關シテハ相互ニ最惠國
 ノ待遇ヲ與フヘキモノトス

第十二條

日清兩國政府ハ本日調印シタル條約及
 附屬協約ノ各條ニ記載セル一切ノ事項
 ニ關シ相互ニ最優ノ待遇ヲ與フルコト
 ヲ承諾ス

本協約ハ調印ノ日ヨリ効力ヲ生スヘク
 且本日調印ノ條約批准セラレタル時ハ
 本協約モ亦同時ニ批准セラレタルモノ

ト看做スヘシ
右證據トシテ下名ハ各其本國政府ヨリ
相當ノ委任ヲ受ケ日本文及漢文ヲ以テ
作ラレタル各二通ノ本協約ニ記名調印
スルモノナリ
明治三十八年十二月二十二日即光緒三
十一年十一月二十六日北京ニ於テ之ヲ
作ル

大日本帝國特派全權大使外務大臣從三位勳等男爵小村壽太郎記名印
大日本帝國特命全權公使從四位勳二等 内田康哉記名印

大清國欽差全權大臣軍機大臣總理外務部事務 慶親王(記名印)
大清國欽差全權大臣軍機大臣外務部尚書會辦大臣 瞿鴻禨(記名印)
大清國欽差全權大臣北洋大臣太子少保直隸總督 袁世凱(記名印)